

# 保育者養成施設での組織的創作活動における 改善点の検討

——学生の他者を評価する視点の調査を通して——

## A Study on the Examination of Improvement Points in Organizational Creative Activities at Early Childhood Educator Training School: Through a Survey of Students' Perspectives on Evaluating Others

葛谷 潔昭・佐々木 友里

Kiyoaki Kuzuya, Yuri Sasaki

### はじめに

保育士養成校で、保育の実践として、生活発表会などで保育者が自ら組織的創作活動を発表したり、園児に実践を求めたりすることがある。私たちが勤務する保育者養成校では、創設以降、毎年度、学生の主体的な共同活動を通して、保育者が社会性を養い、園児に対する指導力を養うことを重要視している。具体的には、保育の五つの領域の中の「表現」の領域の組織的創作活動の一環としてオペレッタ創作を通して、保育者として活躍するための社会性の獲得など人格形成につなげている。

この研究は、2016年度から継続しているものであり、「保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力（社会人基礎力）獲得の学生評価のグループ討議後の変容について」等の続編である。現在、組織的表現活動の社会人基礎力と非認知能力の個人評価フォームを作成中であり、仮の案（葛谷・佐々木2022）を示し、保育学会の学会員から意見を得たところである<sup>1)</sup>。その際に示した個人評価フォームの特徴として「最も活躍したと思う個人（他者）を取り上げ、その者が発揮したと考える非認知能力を選択する」項目がある。保育学会の発表時の意見交換では、グループ構成員個人が、他者のどのような能力を評価しているのかのデータを集めることに対し、意義があるという意見を得た。そこで、本稿では、その「他者に対する評価」の部分の開発の際に得た、データの分析

を試み、どの役割を担った学生が、どのような学生を「評価している」のかについて、分析を試み、今後の組織的創作活動の課題を示すこととしたい。

## 研究方法

本研究は、2021年1月と2022年1月に最高学年である保育学科2年生が「卒業記念音楽発表会」として行ったオペレッタ制作の創作の発表後に、学生自身が自身の役割を記載した上で、最も活躍したと思われる他者(記名)を取り上げ、その活躍内容を選択するという形で調査を行ったものである。

## 調査内容・分析方法

その調査票を作成し、アンケート調査を実施した流れは下記の通りである。

1：2020年5月下旬 学生によるオペレッタ制作の演目などの検討会を実施。その際、教員により、組織的創作活動(オペレッタ制作)の重要性について説明を行った上で、どのような能力を発揮した個人が評価されるのか意見交換を行った。その際、実施後、特に活躍した個人を自由記述で記入する調査を2015年に行っていたことを教員から説明を行った。

2：その検討会では、学生側から他者評価のアンケートの実施の是非も含め意見が述べられたが、「どのような力を発揮した個人が評価されるのかの情報を得て今後の指導の参考にしたい」とする教員側の意見に理解を示す意見が半数以上(挙手による回答)を占めた。

3：では、どのような能力を発揮した個人が評価されるのかについて、2020年6月初旬に、教員が呼びかけを行って、学生を招集した上で、学生間の意見交換会を実施した。「一言で分かる項目名が良い」という意見が出され、「〇〇性」「〇〇シップ」という一言で分かる能力と特性を表現する項目に収斂させることとした。その結果、(1)積極性、(2)演技力、(3)協調性、(4)リーダーシップ、(5)柔軟性、(6)行動力、(7)責任感、(8)発想力、(9)その他、が示された。なお、順序は決まった順番であり、重要度ではないということであった。回答は、複数回答可とした。なお、本研究でとりあげている、社会人基礎力と非認知能力の個人評価フォームの「自己評価」シートで取り上げている能力である「社会人基礎力」と「非認知能力」の視点で示した項目(1. 主体性、2. 実行力、3. 働きかけ力、4. 課題発見力、5. 計画力、6. 創造力、7. 発信力、8. 傾聴力、9. 柔軟力、10. 状況把握力、11. 規律性、12. ストレスコントロール力、13. 自己価値付加力、14. 学習深化力、15. 人脈多様性、16. 視野・思考拡大力、17. 経験多様性、18. 組織・自己認識力、19. 統率力、20. 意欲、21. 自信、22. 問題解決力、23. 批判的思考力、24. 自己管理能力、25. 自己肯定感、26. 探究心、27. 根気強さ、28. 注意深さ、29. 共感性、30. 協調性、31. 道徳心、32. 倫理観、33. 公共性、34. コミュニケーション力)<sup>2)</sup>については、学生の意見から最も活躍したメンバーの評価としては、選びにくい、評価しにくいという理由で、採用は見

送られている。

4：教員側から、回答者情報として、自身の役割の項目は必要である、という意見・希望を出した。その際、選択肢化を示唆する意見が出されたが、最終的に学生の意見で決めてもらった。担う役割に個人差やグループ間の差があり、さらに回答や意見の差もあり得るという理由で、選択肢化を見送り、自由記述となった。

5：学生の意見交換の結果、名簿上のグループのリーダーと回答者が担ったとする役割の回答の不一致がないように考慮した結果として、アンケートの回答は記名式とした。

6：2021年1月 開催後の報告書をまとめ終わった段階でアンケート、全員（2グループ）に対して実施。

7：比較対象枠として、前年度検討したアンケートをそのまま、2022年1月実施のグループ（1グループ）に対して、「4」と同じタイミングで実施した。回答は、アンケート用紙をそのまま解釈して回答するようにと伝えて実施した。

なお、分析方法については、年度ごと、グループごと、全員で集計を行い、回答者の役割と、一番活躍した個人名と、その個人が活躍し発揮した能力について回答者数・比率を比較し、その理由を考察することとした。

## 調査結果

各グループメンバーが選択した「評価した能力・特性」についての集計結果は表1の通りである。全ての比率（パーセンテージ）は、小数点第1位を四捨五入している。評価項目を検討した2020年度実施のグループのうち、Aグループに関しては、回答総数が12名で、回答率100%であった。カッコ内の比率は、12名を母数とした。多い順で、リーダーシップ7名（58%）、責任感7名（58%）、行動力6名（50%）、発想力6名（50%）、積極性5名（42%）、協調性4名（33%）、演技力2名（17%）、柔軟性1名（8%）であった。

Bグループに関しては、回答総数が12名で、回答率100%であった。カッコ内の比率は、12名を母数とした。多い順で、演技力8名（67%）、リーダーシップ7名（58%）、責任感5名（42%）、積極性3名（25%）、行動力2名（17%）、協調性1名（8%）、発想力1名（8%）で、柔軟性の回答は無かった。

2020年度実施の全グループ（AグループとBグループ）を合算した結果については（回答総数24名）、リーダーシップ14名（58%）、責任感12名（50%）、演技力10名（42%）、積極性8名（33%）、行動力8名（33%）、発想力7名（29%）、協調性5名（21%）、柔軟性1名（4%）であった。

一方、前年度のアンケート調査票をそのまま配布し実施した2021年度実施のグループ（Cグループ）については、回答総数が13名で、回答率100%であった。カッコ内の比率は、13名を母数とした。多い順で、行動力11名（85%）、積極性9名（69%）、演技力9名（69%）、協調性9名（69%）、責任感8名（62%）、発想力7名（54%）、リーダーシップ5名（38%）で、柔軟性の回答は無かった。

2020年度実施分と2021年度実施分の回答総数37名分の集計では、多い順で、責任感20名 (54%)、演技力19名 (51%)、リーダーシップ19名 (51%)、行動力19名 (51%)、積極性17名 (46%)、協調性14名 (38%)、発想力14名 (38%)、柔軟性1名 (3%) であった。

続いて、各グループのメンバーで、最も活躍したと評価した個人が誰であり、どのような評価だったのかの視点で集計した結果について示す。それは、表2～4の通りである。全ての比率（パーセンテージ）は、小数点第1位を四捨五入している。

2020年度実施のAグループについては、表2の通りである。回答総数12名のうち、一番多くの学生が評価したのが、「Wさん」である。この学生は、グループ内の役割について、本人からの申告によると「グループリーダー」の役割を担った者である。選択者は8名で、グループメンバー12名に占める割合で67%であった。「Wさん」に対して評価した能力・特性（複数回答可）については、多い順で、リーダーシップ7名（該当者を選択した者に占める割合で88%。以下同じ）、責任感5名（63%）、行動力3名（38%）、発想力3名（38%）、積極性2名（25%）、演技力2名（25%）、協調性2名（25%）、柔軟性は回答者なしであった。

次に多かったのは「IEさん」で、本人からの申告だが担った役割は「衣装係」とのことである。その「IEさん」を選択した者は、グループメンバー12名のうち、2名で、17%を占めている。「IEさん」に対して評価した能力・特性（複数回答可）については、多い順で、積極性2名（該当者を選択した者に占める割合で100%、以下同じ）、行動力2名（100%）、責任感2名（100%）、発想力2名（100%）であり、演技力、協調性、リーダーシップ、柔軟性は、回答者なしだった。続いて、リーダーである「Wさん」が、最も活躍としたとする者は、「Oさん」である。役割は、本人申告で

表1 最も活躍した者として「評価された能力・特性」

2020年度 A グループ (N=12)			2020年度 B グループ (N=12)			2020年度全合計 (N=24)			2021年度 C グループ (N=13)			2020年度+2021年度 (N=37)		
活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率
リーダーシップ	7	58%	演技力	8	67%	リーダーシップ	14	58%	行動力	11	85%	責任感	20	54%
責任感	7	58%	リーダーシップ	7	58%	責任感	12	50%	積極性	9	69%	演技力	19	51%
行動力	6	50%	責任感	5	42%	演技力	10	42%	演技力	9	69%	リーダーシップ	19	51%
発想力	6	50%	積極性	3	25%	積極性	8	33%	協調性	9	69%	行動力	19	51%
積極性	5	42%	行動力	2	17%	行動力	8	33%	責任感	8	62%	積極性	17	46%
協調性	4	33%	協調性	1	8%	発想力	7	29%	発想力	7	54%	協調性	14	38%
演技力	2	17%	発想力	1	8%	協調性	5	21%	リーダーシップ	5	38%	発想力	14	38%
柔軟性	1	8%	柔軟性	0	0%	柔軟性	1	4%	柔軟性	0	0%	柔軟性	1	3%

表2 グループ（演目）別 選択した個人集計表「2020年度Aグループ」（N=12）

活躍者			Wさん			活躍者			IEさん			活躍者			Oさん			活躍者			KYさん		
役割（本人申告）			リーダー			役割（本人申告）			衣装係			役割（本人申告）			衣装係			役割（本人申告）			衣装係		
選択者数	8	67%	選択者数	2	17%	選択者数	1	8%	選択者数	1	8%	選択者数	1	8%	選択者数	1	8%	選択者数	1	8%	選択者数	1	8%
活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率
リーダーシップ	7	88%	積極性	2	100%	積極性	1	100%	積極性	1	100%	積極性	1	100%	リーダーシップ	0	0%	積極性	1	100%	リーダーシップ	0	0%
責任感	5	63%	行動力	2	100%	協調性	1	100%	協調性	1	100%	協調性	1	100%	柔軟性	1	100%	責任感	1	100%	柔軟性	1	100%
行動力	3	38%	責任感	2	100%	行動力	1	100%	行動力	1	100%	行動力	1	100%	積極性	0	0%	責任感	0	0%	積極性	0	0%
発想力	3	38%	発想力	2	100%	発想力	1	100%	発想力	1	100%	発想力	1	100%	演技力	0	0%	発想力	0	0%	演技力	0	0%
積極性	2	25%	演技力	0	0%	演技力	0	0%	演技力	0	0%	演技力	0	0%	リーダーシップ	0	0%	演技力	0	0%	リーダーシップ	0	0%
演技力	2	25%	協調性	0	0%	リーダーシップ	0	0%	リーダーシップ	0	0%	リーダーシップ	0	0%	行動力	0	0%	リーダーシップ	0	0%	行動力	0	0%
協調性	2	25%	リーダーシップ	0	0%	柔軟性	0	0%	柔軟性	0	0%	柔軟性	0	0%	責任感	0	0%	柔軟性	0	0%	責任感	0	0%
柔軟性	0	0%	柔軟性	0	0%	責任感	0	0%	責任感	0	0%	責任感	0	0%	発想力	0	0%	責任感	0	0%	発想力	0	0%

（リーダー回答：上記）

「衣装係」であった。選択者は、リーダーだけの1名（8%）であった。評価した能力・特性（複数回答可）については、積極性、協調性、行動力、発想力で、それら以外の項目は選択されていなかった。他にも、グループメンバーの1名（8%）が選んだのは「KYさん」で、役割は、本人申告で「衣装係」であった。評価した能力・特性（複数回答可）については、協調性、柔軟性で、それら以外の項目は選択されていなかった。

続いて、2020年度実施のBグループの結果については、表3の通りである。最も活躍したとされる者は「IMさん」である。選択した者は、6名で、グループメンバー数12名に占める割合は、50%であった。役割は、本人申告によると「グループリーダー」である。評価した能力・特性（複数回答可）については、リーダーシップ6名（該当者を選択した者に占める割合で100%、以下同じ）、演技力4名（80%）、積極性2名（40%）、行動力1名（20%）、責任感1名（20%）、発想力1名（20%）で、協調性と柔軟性を選択したものはなかった。

次に多かったのは、「Tさん」である。担った役割（本人申告）は「グループ副リーダー」である。「Tさん」を最も活躍したと選択した者は、3名で、グループメンバーの中では25%を占めている。評価した能力・特性（複数回答可）については、演技力2名（選択者に占める割合で67%、以下同じ）で、こちらは、リーダーからの回答も含まれている。次に、積極性1名（33%）、リーダーシップ1名（33%）、責任感1名（33%）で、それら以外の項目は選択されていなかった。そして、次に

表3 グループ(演目)別 選択した個人集計表「2020年度Bグループ」(N=12)

活躍者 IMさん			活躍者 Tさん			活躍者 FYさん			活躍者 FNさん		
役割(本人申告)		リーダー	役割(本人申告)		副リーダー	役割(本人申告)		小道具・衣装係	役割(本人申告)		副リーダー
選択者数	6	50%	選択者数	3	25%	選択者数	2	17%	選択者数	1	8%
活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率
リーダーシップ	6	100%	演技力	2	67%	演技力	2	100%	責任感	1	100%
演技力	4	80%	積極性	1	33%	責任感	2	100%	積極性	0	0%
積極性	2	40%	リーダーシップ	1	33%	協調性	1	50%	演技力	0	0%
行動力	1	20%	責任感	1	33%	行動力	1	50%	協調性	0	0%
責任感	1	20%	協調性	0	0%	積極性	0	0%	リーダーシップ	0	0%
発想力	1	20%	柔軟性	0	0%	リーダーシップ	0	0%	柔軟性	0	0%
協調性	0	0%	行動力	0	0%	柔軟性	0	0%	行動力	0	0%
柔軟性	0	0%	発想力	0	0%	発想力	0	0%	発想力	0	0%

(リーダー回答:演技力)

多かったのは「FYさん」である。選択した者は、2名で、グループメンバーの17%を占めていた。担った役割(本人申告)は「小道具・衣装係」であった。評価した能力・特性(複数回答可)については、演技力2名(該当者を選択した者に占める割合で100%、以下同じ)、責任感2名(100%)、協調性1名(50%)、行動力1名(50%)で、その他の項目は選択されていなかった。最後に、最も活躍者として、1名のグループメンバーが選択したのが「FNさん」である。グループメンバーの8%を占めている。担った役割(本人申告)は「グループ副リーダー」であった。評価した能力・特性(複数回答可)については、責任感1名(該当者を選択した者の100%)であった。

最後に、2021年度実施のグループであるCグループの回答については、表4の通りである。

このグループは、メンバーの人数は13名となっている。一番活躍した個人として回答したもので一番多かったのは「全員」であった。個人を選択するという質問にしてあったが、意図的に「全員」としていると思われる。答えたのは9名で、グループメンバーの69%を占めている。評価した能力・特性(複数回答可)については、行動力9名(全員と回答した者に占める割合が100%、以下同じ)、演技力8名(89%)、協調性8名(89%)、積極性7名(78%)、発想力7名(78%)、責任感6名(67%)、リーダーシップ3名(33%)で、柔軟性の選択者はいなかった。なお、この「全員」と回答した者には「届出上のリーダー」のKRさんが含まれていた。先述のA・Bグループでは、自己申告のリーダーと届出上のリーダーが一致していたが、このCグループだけは、リーダーとして

表4 グループ（演目）別 選択した個人集計表「2021年度Cグループ」（N=13）

活躍者		全員		活躍者		KRさん		活躍者		ARさん	
役割（本人申告）				役割（本人申告）		無回答（届出上のリーダー）		役割（本人申告）		仲介役	
選択者数	9	比率	69%	選択者数	3	比率	23%	選択者数	1	比率	8%
活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率	活躍内容	人数	比率			
行動力	9	100%	リーダーシップ	2	67%	積極性	1	100%			
演技力	8	89%	積極性	1	33%	演技力	1	100%			
協調性	8	89%	行動力	1	33%	協調性	1	100%			
積極性	7	78%	責任感	1	33%	行動力	1	100%			
発想力	7	78%	演技力	0	0%	責任感	1	100%			
責任感	6	67%	協調性	0	0%	リーダーシップ	0	0%			
リーダーシップ	3	33%	柔軟性	0	0%	柔軟性	0	0%			
柔軟性	0	0%	発想力	0	0%	発想力	0	0%			
（リーダー（推定）回答：演技力・協調性・行動力・発想力）											

自己申告した者はいなかった。そのため「届出上のリーダー」と表記している。この者は、演技力・協調性・行動力・発想力を選択していた。

そして、次に多かったのが、届出上のリーダーの「KRさん」である。KRさんを最も活躍した個人として選択した者は、3名で、グループメンバーの23%を占めていた。評価した能力・特性（複数回答可）については、リーダーシップ2名（該当者を選択した者の67%、以下同じ）、積極性1名（33%）、行動力1名（33%）、責任感1名（33%）で、それら以外は選択されていなかった。そして、最後は、「ARさん」である。選択した者は、1名で、グループメンバーの8%を占めている。担った役割（本人申告）は、「仲介役」であった。評価した能力・特性（複数回答可）については、積極性1名（100%）、演技力1名（100%）、協調性1名（100%）、行動力1名（100%）、責任感1名（100%）で、それら以外の項目は、選択されていなかった。

#### 考察・結論

Aグループのメンバーは、最も評価したメンバーとして7割弱の者（12名中8名）が「グループリーダー」を選択しており、その中で、「リーダーシップ」と、「責任感」を選んだ者が、グループメンバーの半数以上（12名中7名）を占めており、組織のマネジメントとそれに対する責任感、結

果の确实性に重きを置いた傾向がうかがえる。

Bグループのメンバーは、最も評価したメンバーとして5割の者(12名中6名)が「グループリーダー」を選択しており、その全員が「リーダーシップ」を選んでおり、Aグループ同様、組織マネジメントと責任感を重要視した傾向がうかがえた。しかし、次に多かったのが「演技力」であり、グループリーダーを選んだ者の8割が「演技力」を評価しており、リーダーと副リーダーを選んだ者のうち7割以上(11名中8名)、グループメンバー全体では6割以上(12名中8名)を占めており、リーダー以外の者で最も活躍したものとして選ばれた者3名のうち2名に対して評価された要素の首位が「演技力」であった。Bグループでは、演技力もリーダーたる条件や評価されるメンバーの条件として選択していたことがうかがえた。

Cグループのメンバーは、最も評価したメンバーとして約7割の者(13名中9名)が「全員」を選んだこともあり、評価した特性・能力の傾向が異なっていた。その回答者の全員、グループメンバーの7割弱の者(13名中9名)が「行動力」を選択しており、そして、回答者の9割弱、グループメンバーの6割超の者(13名中8名)が「協調性」を選び、その次(グループメンバーの5割超、13名中7名)が「積極性」を選んでいった。そこから、グループメンバーの多くが、自ら判断し、自発的かつ積極的に行動し、オペレッタ創作を作り上げたと認識していることがうかがえる。また、多くのメンバーが「全員」を選んだのは、教員から、この研究・アンケートの提案を受け、項目・内容について検討した、A・Bグループと異なり、そのままアンケートを受け入れて実施したため、個人を選ぶ回答に対する同意ができなかった可能性もある。しかし、このアンケートの趣旨を伝えてあったため、教員に「全員で頑張った」ことを伝え、それこそが、オペレッタ創作の重要な要素であることを伝えなかったのだろうと推測される。なお、Cグループの中で、グループリーダーを選んだ者は、リーダーシップを最も多く選んでおり、次に、積極性、行動力、責任感を選んでおり、演技力を重要視したBグループよりも、Aグループに近い判断基準を持っていたと考えられる。

なお、リーダー以外に選んだメンバーとしては、Aグループは、副リーダーを置いていたにも関わらず、選ばれていなかった。しかし、グループリーダー以外のメンバーを選んだ学生が4名おり、グループリーダーではない者に対して積極性と行動力を持った者を評価しており(3名)、その中で責任感を評価したものが2名いた。肩書を持たないにもかかわらず積極性を発揮した責任感がある者を評価している。さらにグループリーダー以外を選んだ者のうち2名は、協調性を評価しており、そのうち1名は、柔軟性も発揮したと評価している。この結果からBグループでは、「グループメンバーとして、グループの動きを察知して、その場に応じた積極性や責任感を発揮し、さらに柔軟性、協調性を発揮することの大切さ」を意識していた者がいたことがうかがえる。Bグループは、副リーダーがリーダーの次に選ばれていた。傾向は一定ではないが、責任感を持ってグループを引っ張るというよりも、積極的にメンバーのフォローを行うものを評価している傾向が感じられた。また、全てのグループにおいて、リーダー以外を選んだ場合、先述の通り、「演技力」も重視している傾向も感じられ、舞台の上で、本番の緊張感の中で、演じ切る姿勢に対する敬意も評価の要素になったと思われる。

以上のことから、全体としては、個人を選んだ場合は、リーダーを選ぶ傾向があり、組織のリーダーとして責任感を持って行動する者を評価すべき者として、重要視する傾向がうかがえた。また、個人を選んで評価する重要性を感じながらも、全員が評価すべき対象という考え方も重要であることがわかった。メンバーそれぞれに異なった役割があり、全員がその役割を全うすることも、評価として重要な側面であることを示している。また、他には、メンバーのフォロー役の重要性も示している一方、表舞台で演じる能力も重要視している傾向も感じられた。以上のように、大多数はリーダーを評価していたが、少数ながらフォロー役も評価し、少数ながら舞台上だけでなく、裏方も評価する者がいることがわかった。

### 今後の課題

今回の研究では、オペレッタ創作という組織的創作活動において学生側の他者に対する評価としては、リーダーの「リーダーシップ」や「責任感」を評価した者が、最も多かったことが示された。しかし、日常の活動を見守って、学生側の感情を傾聴している限り、リーダーや副リーダーの役割をフォローするメンバーの存在の重要性や、脚本や衣装作成、大道具・小道具の製作者などの「裏方の活動・役割」が、重要であることが語られている。そこからも組織的創作活動の要素と存在意義を学んで欲しいと、教員としては考えていたが、ごく少数ながらそのようなメンバーの活躍を評価した学生がいたことは、救いではあった。しかし、多くの学生は、リーダーや副リーダーの役割を担った学生を最も評価できると選択しており、「裏方の活動・役割」の重要性も認識できるような評価できるように、最も評価できた者と、2番目に評価できた者を選ぶことができるようにするといった、回答シートの改善と工夫の必要性も感じた。

また、今回、最も評価された者が発揮した能力として採用を見送った「社会人基礎力」、「非認知能力」との連動性も付加するべきなのかは、今後も引き続き検討課題としていきたい。

筆者は、組織的創作活動は、裏方から舞台上の活動全体で、人格や社会性を育み、非認知能力や社会人基礎力を育て、身に付ける活動であると考えている。その点については、谷口（2010）の研究では、演劇活動の役割分担とその分担の中で意見交換し、演劇を作り上げるプロセスの効果を「コミュニケーション能力」の醸成の側面で説明している。また、渡邊・楠見（2021）の研究では、演劇する群と戯曲を読解する群に分け実験を行いながら、演劇をすること、特に自分と異なる人物などの「役を演じること」、「物語に移入すること」を通して、他者への理解や共感の能力が高まる可能性を示している。その「演劇の制作プロセス」と「演じること」や「役割を果たすこと」が、社会人基礎力や非認知能力を高めるという意義があることがもっと伝わり、学生の相互評価の基準として反映され、それが励みになるような活動や、振り返りとなるような取り組みを続けていくべきだと思った。例えば、学生の思いや意見と教員側の狙いと目標のすり合わせができていて、学生の相互評価の項目・評価基準・評価シートの開発を今後も行っていきたい。

## 引用文献

- 1) 葛谷潔昭・佐々木友里. (2022). 社会の変化に対応した, オペレッタ創作による非認知能力の獲得度評価ツールの開発について (保育者養成における組織的表現創作活動の個人評価フォームの開発). 日本保育学会75回大会オンライン (P-A-7 保育者の資質能力・保育者の専門性など2), ポスター発表要旨, 1-2
- 2) 葛谷潔昭・佐々木友里. (2022). 社会の変化に対応した, オペレッタ創作による非認知能力の獲得度評価ツールの開発について (保育者養成における組織的表現創作活動の個人評価フォームの開発). 日本保育学会75回大会オンライン (P-A-7 保育者の資質能力・保育者の専門性など2), ポスター発表要旨, 2

## 参考文献

- James J. Heckman. (2006). *Skill Formation and the Economics of Investing in Disadvantaged Children.*: Science, 312, 1900-1902
- 経済産業省社会人基礎力に関する研究会. (2006). 社会人基礎力に関する研究会－中間取りまとめ－.
- 経済産業省産業人材政策室. (2018). 人生100年時代の社会人基礎力について.  
<https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/Ecforthe100-yearlife.pdf> (2023年8月1日閲覧)
- 経済産業省 (編)・河合塾 (著). (2010). 社会人基礎力育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために, 教育の実践現場から. : 朝日新聞出版.
- 葛谷潔昭・佐々木友里. (2022). 社会の変化に対応した, オペレッタ創作による非認知能力の獲得度評価ツールの開発について (保育者養成における組織的表現創作活動の個人評価フォームの開発). 日本保育学会75回大会オンライン (P-A-7 保育者の資質能力・保育者の専門性など2), ポスター発表要旨
- 葛谷潔昭・佐々木友里. (2022). オペレッタ創作による保育者としての社会人基礎力・非認知能力の獲得に関する研究－「すべきこと」と獲得度の認識を通して(2)－. 豊岡短期大学論集, 19, 271-281
- 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所. (2018). 「非認知能力」の概念に関する考察.  
<https://www.shogai-soken.or.jp/research/non-cog2018.pdf> (2023年8月1日閲覧)
- 遠藤利彦ら. (2017). 非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究報告書. : 国立教育政策研究所.  
[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h28a/syocyu-2-1\\_a.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-2-1_a.pdf) (2023年8月1日閲覧)
- 佐々木友里・葛谷潔昭. (2019). 保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力 (社会人基礎力) 獲得の学生評価のグループ討議後の変容について. 豊岡短期大学論集, 16, 139-152
- 佐々木友里・葛谷潔昭. (2020). オペレッタ創作による保育者としての社会人基礎力・非認知能力の獲得に関する研究－「すべきこと」と獲得度の認識を通して(1)－. 豊岡短期大学論集, 17, 215-226
- 谷口直隆. (2010). コミュニケーション教育における演劇的活動の意義と可能性－目標と方法の対応という観点からの考察－. 国語教育思想研究, 2, 11-20.
- 渡邊智也・楠見 孝. (2021). 演劇体験が社会的能力に及ぼす促進効果の実験的検討. 認知科学, 28 (1), 122-138. 日本認知科学会.